

メッセージ

社会課題を解決するために、なぜ、研究開発と人材育成の両立が重要なのか？これまでの RISTEX の取り組みを支える 3 名から、社会技術の研究開発に尽力される皆様へのメッセージです。



学術の専門分野にある境界線を超えて、手を取り合うために



小林 傳司
社会技術研究開発センター(RISTEX) センター長
大阪大学教授、理事・副学長を歴任
現在、同大学COデザインセンター特任教授

RISTEXは理工系の戦略的研究ファンディング機関であるJSTの中で、例外的に社会課題の解決に向けて、分野を超えて理工系のみならず人文社会科学系を含むあらゆる学問を動員する姿勢でファンディングをしてきました。しかし分野の異なる学問を課題解決に動員するのは容易ではありません。そこで、総括、アドバイザー、RISTEX スタッフが研究開発プロジェクトに対してさまざまなサポートを行う仕組みを発展させてきました。まだまだ改良の余地はありますが、採択された研究開発プロジェクトに寄り添い、課題解決のためにアドバイスする仕組みは、社会のための科学技術という目標を実現するために大変重要だと思っています。

大きな課題に向き合う人こそ、成果が社会で利用されるための人材育成を



山田 肇
「安全な暮らしをつくる新しい公/私空間の構築」研究開発領域(公私領域) 総括
東洋大学名誉教授、NPO法人 情報通信政策フォーラム理事長

公私領域では、悩みを抱えて私空間に孤立する人々に手を差し伸べる社会技術を研究開発してきました。成果が社会で利用される仕組みを作る成果定着支援制度も設けています。社会への普及には、現場で人々に手を差し伸べる人材が不可欠であり、そのためには担い手育成もしなければなりません。しかし、研究開発と人材育成の両立は簡単なことではないでしょう。そこで、大きな課題に向き合う社会技術分野の研究者に向けて、人材育成の事例ノウハウを冊子にしました。どうぞお使いください。

育成された人材と、どのようなコミュニティをつくるのか — 学会から家元制まで —



川北 秀人
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム(SOLVE for SDGs) 総括補佐
「安全な暮らしをつくる新しい公/私空間の構築」研究開発領域(公私領域) 評価専門アドバイザー
IIHOE [人と組織と地球のための国際研究所] 代表者

研究者は、「育成された人材とどのようなコミュニティを作るか」という問いに、取り組みに着手する段階から向き合い続ける必要があります。育成された担い手の数が増えると、フォローアップや学びあいの場づくりは難しくなっていきます。多様にあるコミュニティの在り方を、非営利か営利かという知的財産の管理・活用の観点で分類すると、学会は最も緩やかな体制だといえます。次いで、会員制のNPO(主な収入源は会費)、事業型のNPO(主な収入源は利用料や受託費など)、士業協会や組合(公的資格制度の有資格者のみで組織)、一般的な事業会社と続き、最も厳しい体制が家元制でしょう。研究代表者には、研究成果をどのように世の中で活用し、担い手とどのような関係でありたいか、長期的な体制の担い方と重ねながら検討していただきたいと思います。